

ワインブドウ生産農家となって

北海道余市町 牧野時夫

昨年の春、私は一大決心をして、それまで勤めていたワイナリーを辞め、百姓になった。きっかけは、私が勤めていたサッポロワイン社が、余市で他社に先駆けて9年ほど前に契約栽培を開始した農家が、事情により辞めることとなり、しかしその畑を引継ぐ農家もすぐにはみつかりそうにはない、ということであった。

余市は、古くから隣町の仁木と共に、北海道随一の果樹地帯であったが、この数年間でワインブドウの産地としては国内随一に成長した。それには、私の引継いだこの農家の先駆的な働きがあったわけだし、北海道の推奨品種ではなかったケルナーがこれだけ広まったのも、この畑があったからだと思う。その畑を潰してしまうのは忍びなかったし、それよりも、その農家が出来ただけ農薬を使わない農業を実践してきて、そのような意志を引継いでくれる人に譲りたいということだったから、私が以前から考えてきたこととも一致した。経営が成り立って行くかどうかという不安は大いにあったが、このようなチャンスはまたとないかもしれないと考え、百姓としての道に踏み込んだわけである。

私が目指すところの農業は、生態系を大切にしたい農業である。そこで、農場の名前もマキノ・エコロジカル・ファームと名付けた。安全でおいしい作物を求める消費者によって、有機農業というものが見直されてもいる。しかし、私はもっと別な面から、これからは有機農業でなくてはならないと思っている。化学肥料や、農薬、除草剤などを多用する近代農業は、生態系を無視した非永続的なものだった。土を悪くし、作物をひ弱にし、天敵を殺し、病気や害虫の雑草の抵抗性を増し、そのために、さらに多量の、より強力な化学合成物質を投入しなければならない悪循環に陥っている。そのような農業が、長続きするわけがない。もう一つ、農家にとって一番困るのが、過剰生産による豊作貧乏というやつである。それに対抗できるのも、有機農業しかないのではないかと考えている。なぜなら、有機農業には、小規模複合経営が最もふさわしいからである。

しかし実際問題、農家が有機農業に転換するためには、経営上の問題が大きいのしかかってくる。化学肥料に比べると、有機肥料はコスト高であるし、多少の減収は覚悟しなければならない。しかも、無農薬でなければならぬとなったら、全減する可能性だって十分にある。そのリスクを全て生産者に負わせるというのは、酷な話である。しかしながら、ほとんどそれらの負担は、良心的な生産者に押し付けられているのが現状である。

また、現実に日本のような高温多湿の国で、それも病気に弱いヴィニフェラ種のワインブドウなど無農薬で栽培することなど可能であろうか。昨年、私が散布した農薬は、萌芽前に石灰硫黄合剤、開花期に水和硫黄剤、生育期にボルドー液2回、成熟期にロブラールと、休眠期散布を含めても全部で5回で済ませた(ちなみに、生食用のブドウは、萌芽前の石灰硫黄合剤だけで済ませた)。しかも、スピードスプレーヤーは用いず手散布なので、ロブラールは房の近くにしか掛けなかったし、使用量もかなり抑えられている。

余市ではワインブドウの場合、普及所の作成した防除暦によると、農薬の散布回数は7回から必要に応じてさらに1~2回追加となっているが、実際に多い農家では12回以上も散布されている。それでも、山梨や岡山に比べれば、散布回数は約半分て済んでいるの

ではないだろうか。去年は、6～10月までいずれの月も日照時間が例年の5～7割しかなく、雨がしょっちゅう降っているという、北海道としては信じられないような最悪の気象条件であった。それでも、5回の散布で大した実害もなく、高品質のケルナーを収穫することができた。雨が少なければ、ロブラールを使わずに、有機ワイン（オーガニック・ワイン）が可能となったかもしれない。というのも、ロブラール以外に私が使用した農薬は、すべて今年から農水省が作った有機農産物の表示基準でも使用が認められている数少ない非合成農薬であって、アメリカやECでも、これらの農薬は有機農産物への使用が許可されている。ポルドー液は、見た目が悪いので消費者には嫌われるが、合成農薬のようにワインに残留せず、澱引きを速やかに行えば、銅は澱と共にほぼ完全に除去されるから、ワインにとっては最も安全な農薬であるとも言えるし、しかも効果は十分優れている。ポルドー液や水和硫黄剤は、余市ではもう誰も使っておらず、手に入れるのにもてこずったが、何より安価でもあり、使用法さえ間違えなければ薬害もないから、高価な合成新農薬を、決して効率的とはいえない使い方を使用するよりも、このような古くからある農薬にもっと注目してもよいのではないかと思う。

また、除草剤もできるならば使いたくないし、有機農産物には一切使用が禁止されている。当園では当初より不使用であって、イネ科牧草類の草生栽培である。しかし、ワインブドウでは若木のうちはかなり草と競合するし、刈払機で若木もチョンと切ってしまいやすいので、除草剤を使わないで栽培するのは非常に苦勞する。それでも、本州に比べれば草の伸び方も少ないので、畦間はハンマナイフモアで、樹下は刈払機で3回ほど草刈りをしてただけで済ませ、中耕も一切行わなかった。

施肥も、当初より窒素分は全くやっていなかったらしく、私も昨年ほとんど無肥料でやってみた。伸びも適度でほとんど1回の摘芯で済み、そのため、病気も出にくいのであろうと思う。しかし、当園でもすべてが上手く行っているわけではない。剪定方法にも問題があるだろうが、収量がちょっと少ない。ただ、これは仕方がない面もある。余市でも反収2も取っている畑があるが、そのような畑では枝がすごく伸びて、農薬の散布回数も多く、それでも病気が止まらない。まあケルナーであれば反収1もそこそこが適当なのかもしれない。当園はケルナーのみであるが、ツヴァイゲルトならば1.5もは堅いだろう。

最後に、ワイン業界の人達に一言。北海道は果樹農家と言えども一戸当たりの経営面積は広く、余市ではワインブドウを専業にしたり、経営の主体にしている農家も少なからず出てきた。しかしながら、歴史が浅いだけに、ワイナリーは地元の一つしかなく、大半が余市以外のワイナリーに運んで醸造されている。ぜひ、ワインブドウに囲まれたところにワイナリーが欲しい。それがワイン産地というものである。余市のブドウには、十分な糖度と酸、顕著なアロマがあり、これだけの品質を発揮できるのも、日本では他にはないであろう。また、余市には海あり山あり、札幌にも近いし、観光ワイナリーとしても成功すること間違いなしと思うのだが。

ただ、本当に優れたワイン産地となるには、それなりの品種が必要である。現在ではケルナー、ミュラートルガウ、ツヴァイゲルト・レーベの3品種が主体であるが、これだけではもう一つ高級なものに欠ける。リースリングは熟期が遅いので微妙なところだが、ピノ・ノワールやシャルドネは可能ではないかと思っている。今後は、これらの品種の栽培方法を確立することができれば、世界に誇れるワイン産地も夢ではないかもしれない。